

## 070905 河川管理者説明に対する質問

尼崎市 細川 ゆう子

### 4. 3 治水・防災 あらゆる洪水に対応

なぜ「いかなる洪水でも被害を軽減させる」としながら計画規模降雨（5313）を設定するのか？戦後既往最大降雨さえ流れればいいのか。「いかなる」という考えと矛盾していないか。

「上下流・本支川間のバランスに基づく治水対策」は、計画規模(戦後最大流量)を目標として事業計画をしているが、今後 30 年のあいだにそれ以上の降雨があれば、また計画をやり直さねばならない。しかも、想定以上の降雨が降れば、もはや「お手上げ」になる。「いかなる」とは、今までに降った雨だけでなく、降るかもしれない雨をも想定することではないのか。この原案は、流域委員会でも議論してきたことを、まったく無視しているのではないか。

### 4. 3 治水・防災 ソフト対策

基礎案の整備内容シート「地域で守る」には、○土地利用の規制・誘導 ○建築物耐水化 が項目として入っている。原案で外したのはなぜか。

### 4. 3 治水・防災 ハード対策（1）

流域委員会では「いかなる洪水に対しても、壊滅的な被害を回避・軽減する」ことを治水の目的としてきた。河川管理者も、それにしたがって基礎案までを発表してきたのに、なぜ今さら計画規模の洪水を設定するのか。設定しなければならない理由を明確にしてほしい。また、その弊害を認識しているのか？数合わせに汲々として、超過洪水対策を遅らすことになるのではないか。

### 4. 3 治水・防災 ハード対策（2）

堤防を決壊させない方が高規格堤防しかない。高規格堤防（スーパー堤防）は、高度に都市化され、資産が集中する地域では実現不可能である。逆にそのような地域でこそ、堤防を決壊させない補強工法の確立が急がれるのに、あまりにも消極的ではないか。

破堤の原因の80%までが越水なのだ。何よりも耐越水堤防を急ぐべきではないか。越水に耐えるならば、浸透、浸食の対策は必要なくなる。浸透、浸食だけを優先し補強工事を急げば、最終的には越水対策がさらに必要になる。計画規模を決めるゆえの弊害ではないか。

### 4.3.3 上下流・本支川間のバランスに基づく治水対策

#### 全体について

資料の提供の仕方が不親切である。たとえば、流量データは示しているが、水位データがない。これらの流量が、水位に直すとどうなるのか示すべきである。素人には、水位のほうが理解しやすい。両方を示してほしい。また浸水家屋は、床上、床下に分けて示すべき。

河川管理者は狭窄部開削や河道改修による下流への流量増に対し、上流のダムにより流量を抑制することとしている。そのために大戸川ダム、川上ダムが有効であるとしている。それならば、猪名川本川上流にも新たにダムを建設するのか。その論理では、余野川ダムに変わり、狭窄部上流に新たなダムが必要ではないのか。逆に、猪名川で、ダムではなく河床掘削などで対応するのであれば、他の場所も代替案で対応することは可能ではないのか。代替案との比較検討もなしに、ダム計

画があるところだけダムという結論は、論理的でない。水系全体で一貫性した論理がないのではないか。

流域委員会は、流域対応として流域での貯留だけでなく、万一浸水した場合の氾濫原の制御を提言している。河川整備計画原案は、その取り組みがまったくない。計画規模で破堤を起こさないことを前提にして、万一破堤した場合の対策を流域対応で行うことから逃げているのではないか。

### 木津川について

木津川上流（上野地区）で破堤した場合の浸水想定に、ダムあり、ダムなしの比較がない。平成17年ダムワーキング資料（第4回 16.8.19資料1-6）によると、川上ダムによる水位低減効果は0.1mであり、天端—余裕高で破堤した場合、ダムがあっても氾濫面積を減らす効果しかない。ダムがあっても被害は出るのである。天端で破堤した場合は、ダムがあってもなくても、被害は0である。なぜ、ダムワーキングと同様に、比較を示さないのか。

上野遊水地は貯留するので、下流で流量を増加させない。一緒にしないで、河道改修で何m<sup>3</sup>流量増になるのかを示すべきではないか。

第4回ダムWG（H16.8.19）資料1-6「川上ダムの効果について」P20 5313降雨に対する効果を、ダム予定地下流地点で効果量270m<sup>3</sup>/S、大内上流（63.6K）地点での効果量240m<sup>3</sup>/Sとしている。それと比較して、岩倉峡上流部で約200m<sup>3</sup>/Sは妥当な数字であるようだが、枚方地点で、川上ダム整備後400m<sup>3</sup>/Sの効果というのは、理解できない。説明してほしい。

また、その効果量が、水位にして何cmなのかを示してほしい。

### 天ヶ瀬ダム再開発と大戸川ダムの関連について

河川整備計画に記載の治水事業のうち、天ヶ瀬ダムより上流は、瀬田川河床掘削のみである。つまり大戸川ダム、天ヶ瀬ダム再開発は、他の事業地点の上流であるので、両者による流出抑制は、降雨パターンにより、もっと限定的になるのではないか。

第46回委員会（H17.9.24）審議資料1-3「大戸川ダムの調査検討（とりまとめ）」によると枚方地点、宇治地点での天ヶ瀬ダム再開発後の大戸川ダムの効果は、5313型洪水に対して、グラフを見る限り200m<sup>3</sup>/Sもないように見える。数値で示してほしい。

### 河川の整備手順の明確化

河川管理者は、整備計画期間内の道すじを 1. 堤防補強 2. 大戸川ダム・川上ダム 3. 中上流部の改修 2.3. に並行して塔の島改修・天ヶ瀬ダム再開発・瀬田川改修を実施としている。大戸川ダムより天ヶ瀬ダム再開発を優先すれば、どうなるのか。

「大戸川ダムの治水効果—補足資料— 一訂正—」（H16.11.18）P49・P50によれば「狭窄部開削なし、天ヶ瀬ダム再開発後」で、5313×1,18では、大戸川ダムあり、なしで比較して、ほとんど流量に違いはない。堤防補強に続き、大戸川ダムではなく天ヶ瀬ダム再開発を優先すれば、宇治、枚方の流量カットのために大戸川ダムをつくる根拠はないのではないか。大戸川ダムは、黒津地点の流量カットのためにつくるかどうかを、問うべきなのではないか。